

## 残暑お見舞申し上げます。

暑い夏をお過ごしのことと思います。0157の影響はありませんか?新聞等を拝見すると、「ナマモノは口にするな」「よく火を通してから食べよ」「作り置きするな」等の注意が並んでいて、なんか日本もネパール並みだと思っています。幸いわが家は、乾季の頃から仲良くしているジアルジア以外は、大きな感染症には悩まされていませんが、この雨季カトマンズでは、A型肝炎に続いてアメーバ赤痢、ウイルス性感冒とたて続けに流行しました(毎年のことらしいですが)。

さて、今回は、私の独断先行で、夏期増刊号を編集いたしました。第6号で紹介した『小学校建設計画』について、日本大使館から依頼を受けたODA白書向け事業紹介原稿を私が書くことになってしまいました。頼りない私の記憶力と少しだけとったメモを手掛かりに一般向けにわかりやすい文章を心がけたつもりですが、外務省も世界各国から寄せられる原稿の中から選ぶわけですから、日の目を見ない可能性の方がはるかに強いと思います。折角日本のお盆の時期に頭をひねって書いた原稿です。ネパールの教育事情を紹介する一助にもなると考えますので、ここに紹介したいと思います。(浩司)

## 外務省よ、俺の原稿を使ってくれ!! 『小学校建設計画』

わが国は、「ネ」政府からの要請を受け、1994/95、1995/96の2年度にわたり、「ネ」教育省の基礎初等教育プロジェクト(BPEP)の小学校建設プログラムに対し、総額5億87百万円の無償資金協力を実施してきた。この協力により、「ネ」国内5郡において、合計949の教室が建設された。7月23日に、JICAネパール事務所より本件担当の山田所員が、5郡の一つであるチトワン郡の小学校を視察したので、これを報告する。

チトワン郡は「ネ」国中部平野部に位置し、インドとの国境にも近く、交通上の要所に位置している。ヒマラヤを水源とした多くの川が山間部をぬってチトワンに流れ込み、土壌が肥沃で水田耕作が盛んな比較的恵まれた土地である。その一方で、山間部地域からの人口流入が激しく、当地で土地なし層として定着して極貧生活を強いられている。

今回訪問したのは、郡庁所在地バロトプールからほど近い、ギタナガル学校群の『デブナガル初級中等学校』と『スリヤナガル初等学校』である。「ネ」国は各郡を12から20の学校群に分け、学校群単位の教員研修や学校運営監理が行なわれている。また、中等教育は第6学年から10学年までを指すが、「中等学校」は通常第1学年から5学年までの初等教育学校を併設している。

この頃は丁度水牛による水田整地が終了し、女性による「田植え」が各所にて行なわれていた。近隣の女性が一枚の田圃に集まり、横一列で稲を植えてゆく姿は一昔前の日本を思い出させる。農繁期の学校は夏休みのシーズンであり、年長の子供たちは、学校の宿題に頭を悩ませながら、弟妹の子守をし、食事の準備を手伝っていた。

『デブナガル初級中等学校』の校長に話を聞く。この学校は36年前に住民自らがテントを建てて開いたのが始まりで、25年前にレンガ組みの校舎が建設されたという。BPEPによる小学校校舎増設は1995年春で、現在は第1、2学年が使用している。現在全校児童数は401名で、1教室平均55名である。児童は学校から半径2km以内に住んでおり、徒歩30分程度の通学時間でアクセスは比較的良い。農繁期は午前6時~11時、農閑期は午前10時~午後5時を学校時間として、農繁期の授業の遅れを農閑期に取り戻すという運営である。

『スリヤナガル初等学校』も、34年前に住民のイニシアチブで設立された。スリヤナガルは退役軍人が多く住む村であり、住民は自分の能力に応じて設立及び運営経費の負担を行ってきた。25年前までは多くの児童がいたが、スリヤナガルのような地方村落にも私立小中等学校の進出が起きており、経済的に恵まれた児童は私立学校に通い始めた。このため、現在生徒数は101名にまで減少している。しかも、この春BPEPの新校舎が建設されるまで、同校は4教室しかなく、1教室を2学年で共有したり、晴れた日は校庭で授業を行ったりしてやり繰りが行なわれて来たのである。

わが国の無償資金協力で建てられた校舎を見る。レンガ組みでセメントモルタルを使用している校舎は一般的に白い色をしているのが普通であるが、デブナガルの校舎は、住民の費用負担により、校舎に赤茶色の塗装が施されていた。また、スリヤナガルの校舎は、レンガの組み方を工夫して側壁に吹き抜け用の穴を開ける等の工夫が施されていた。高温多湿の気候を考えて、住民自らが行った工夫である。塗装も施されていた。また、ささやかではあるが、校舎の正面には小さな花壇が作られ、いくつかの小さな花が植えられていた。

学校長や学校運営委員会（SMC）の委員からは、「これまで狭い教室で多くの児童が学び、お互いに肘と肘がぶつかるほどの寿司詰め状態で授業を受けてきた。教える側の効率も悪かった。でも、教室が増えたことにより、児童はより広い空間を利用することができ、学習環境はとて良くなったと思う。」との感謝の聲が口々に聞かれた。中には、「これからは、この大切な校舎を大事に使っていきたい。維持管理も自分たちで行なえるよう、頑張っけてゆきたい。」との力強い発言もあった。校舎の側壁には、わが国の協力により建設されたことが、セメントでならしてペンキで藍塗りして作られた記念プレートの上に記されていた。

これらの学校建設は、当該村落住民で形成する学校建設委員会（SCC）がBPEPから請け負う形で行なわれた。わが国の無償資金により調達された建設用資材は郡庁所在地バトプールの集配センター（『デポセンター』）に搬入され、住民の費用負担により、集配センターから建設予定地までの運搬と建設が行なわれる。SCCは、学校やSMCとも連携して、農閑期の村落住民の建設計画への参加を呼びかけ、郡教育事務所から派遣される施工管理者の指示の下、建設を推進していった。SMCの委員によれば、住民参加に同意を得るのはそれほど難しいものではなかったと聞く。わが国の無償資金により調達されるレンガ、セメント、屋根材等は、現場の作業工程に合わせて均質の資材が適時搬入されるため、住民に資金を直接供与して住民自らが資材調達を行なわなければならない援助形態に比べて、極めて効率が良いと高い評価を受けている。

夏期休暇中につき、授業風景を見ることはできなかったが、近隣の何人かの児童にはインタビューすることができた。学校ではどんな科目を習っているのかと尋ねたところ、「ネパール語、英語、社会科、算数、理科、体育、サンスクリット語、道徳、それに英語の補習。」と答えた。4年生のその男子児童は、「ネパール語が一番好き。」と話していた。また、別の女子児童に聞いてみた。「夏休みは何をやっているの。」「うちで弟の面倒を見ているの。あとは炊事のお手伝いをしているの。」「宿題は大変？」「算数の宿題は難しいわ。」女子児童は、はにかみながら答えてくれた。

学校の教員に話を聞くことができた。BPEPは、教育の質の向上を目指し、1992年のプロジェクト発足から1997年7月までに、初等教育5学年のカリキュラムの見直しを終えることになっている。既に3年生まで新カリキュラムが導入されており、教員の間での評判も良い。しかし、そのカリキュラムに基づいた新教科書の供給が新学期に間に合わず、2、3ヵ月教科書なしの状態ですべてを進めることもあるという。また、BPEPの学校群単位の教員研修システムにより、全ての教員が研修を修了した訳ではなく、教授法をさらに磨きたいとの積極的な意見もあった。

両校とも、児童の男女比率は約半々とのこと。また、スリヤナガルでは教員6人中女性教員が2名おり、女子の就学率の低さが問題とされるこの国では、女子児童が比較的就学しやすい環境とは言えるだろう。しかし、児童の父兄も教員も指摘するように、種まきや収穫の季節になると家事手伝いになり出される児童は多い。また、土地なし住民の子供が折角入学しても、月10ルピー程度（約20円）の学校維持費用の供出を親ができないばかりに学校から足が遠のくことは多い。質の向上を通じた基礎初等教育の普及は道半ばとの印象を受けた。

より広い学習空間の確保による教育環境の改善は、BPEPの学校建設プログラムが進行するにつれてかなりの進展が見られた。勿論、同じチトワン郡の中にも、柱4本の上に茅葺きの屋根を作り、その下に長机長椅子を並べただけの教室を見かけることは依然として多い。また、平野部に位置して通学が比較的容易な学校もある一方で、山や谷をいくつも越えて、通学に1時間以上を要する山間部の学校も数多い。このため、わが国政府は、チトワンを含めた10郡での小学校建設計画に対し、さらに2年間の無償資金協力を決定したところである。

「将来何になりたい？」の質問に対し、ある女子児童が「先生。」と答えた。各学校に最低1名の女性教員を配置することはBPEPの目標である。こうした子供たちが健やかに育ち、質の高い教員が、子供たちの中から教育機会の増大に見合うペースで輩出されることを願いつつ、チトワンを後にした。

スリヤナガル初等学校 →

